

JIAMでは、在住外国人にかかわる諸制度や課題について理解を深め、多文化共生社会の進展に対応するための知識の習得、関係機関や部署とのコーディネート能力や企画立案能力の向上を図ることを目的として、「多文化共生マネージャー養成コース」を開催しています。これまで12回の研修を実施し、財団法人自治体国際化協会（CLAIR）が「多文化共生マネージャー（通称：タブマネ）」として認定した人が累計で218名となり、各地で活躍しています。今号では、この第11期生の活躍をご紹介します。

イレブン タブマネ11の活躍

全国市町村国際文化研修所教務部
総括主査 久保 佳代子

20名のタブマネ誕生と東日本大震災

平成22年度第2回多文化共生マネージャー養成コースは、通算11回目となり、受講者間では、自分たちのコースに親しみをこめて「タブマネ11」と呼んでいます。タブマネ11の研修は、平成23年1月28日に終了し、20名のメンバーが新たに多文化共生マネージャー（タブマネ）の仲間入りを果たしました。この回は、自治体職員10名、国際交流協会職員・NPO職員10名で実施しました。研修では、各地域での多文化共生を推進できるキーパーソンとなる人材を育成することを目指し、地域での様々な立場で参加した受講者たちが、それぞれの分野で活躍されている講師陣から講義を受けて幅広い知識を吸収しながら、意見交換や情報交換を行います。また、研修の最後には、自分たちの地域を調査した結果を踏まえ、それらをもとに考えたプランを検討し、講師や仲間からアドバイスや助言を受けながら、完成させていきます。彼らもまた、今までの先

輩たちと同じように、地域での多文化共生の推進のため、そのプランの実行に向けて、意気揚々とそれぞれの地元に戻りました。

その日から約1か月半後に、あの東日本大震災が起き、各地各方面で大混乱が起きました。タブマネ11の修了者の中にも、仙台など宮城県内に居住する者や、関東地域の者もいて、彼らの安否が心配な状況でありました。そのような状況下で、互いにメーリングリスト等で、安否確認や情報収集などを行い、それぞれが、自分たちに何かできることはないかと模索しながら支援について考えていました。

東日本大震災後の支援活動

震災発生日の翌日、多文化共生マネージャーが中心となって設立したNPO法人多文化共生マネージャー全国協議会（NPOタブマネ）が、JIAM内に東北地方太平洋沖地震多言語支援センターを立ち上げ、外国人被災者への情報提供を開始しました。また、被災地により近い地域での支援活動の拠点として、（財）茨城県国際交流協会内に「災害多言語支援センター茨城」が設置されました。ここでの支援活動に、タブマネ11の代表幹事として研修をまとめてくれた群馬県高崎市の鷲谷亨信さんが、設立から中心メンバーとして参加されました。このセンターへの参加は、タブマネの先輩による、タブマネの期を超えたメーリングリスト「タブマネ・クロスオーバー」上で



20名のタブマネ誕生！

の呼びかけにより実現したものでした。センターでの活動においては、先輩たちや近隣の関係者の協力を得て、JIAM内に設置された多言語支援センターとも連携を取りながら、被災地に近い場所で、必要な情報を外国人に提供するために、各方面への翻訳依頼等を行い、情報提供等の支援を行いました。翻訳の業務では、各方面の協力を得ていく中で、タブマネのつながりでも協力を依頼するなど、日ごろのネットワークが本領を発揮したようです。また、茨城の支援センターの運営には、同じくタブマネ11の倉科宏明さん（埼玉県越谷市）や、堀切孝良さん（三重県）らも現地に出向き、協力いただいたとのことでした。



災害多言語支援センター茨城での活動の様子

鷲谷さんは、3月末のセンター解散まで、週末ごとに茨城のセンターに通い、情報発信のお手伝いをされ、解散後も引き続き必要な翻訳業務と情報発信が行えるよう、約2週間の間、かかわってきた業務を設置主体である（財）茨城県国際交流協会に引き継いで、センターを解散したとのことでした。

鷲谷さんは今回の災害多言語支援センター茨城での活動について、「研修を受講していたからこそ、早い段階で協力することができたし、タブマネの先輩たちとの期を超えたネットワークの意義を非常に感じた。研修を受講していて本当によかった」と語ってくれました。

また、同じく茨城での活動にかかわった三重県の堀切さんは、先日愛知県内で開催された報告会において、このセンターの取り組みについて発表されました。「今回の多言語支援

センターの取り組みを、今後につなげるためにも、タブマネとして得た経験を活かしていきたい」と語ってくれました。特に、東海・南海・東南海地震が心配される地域のタブマネとして、堀切さんには三重県内での災害対応への取り組みに役立てていただくことを期待しております。

被災地域のタブマネの活動

（財）宮城県国際交流協会の安田和枝さんも、平成23年1月にタブマネの仲間入りをした一人です。同協会では、地震後間もなく従来の外国人相談センターを拡充した震災対応相談センターを設置し、6台の携帯電話を駆使し、6言語での電話での対応が行われました。そのような中、安田さんは、協会へかかってくる電話での安否確認の情報を宮城県警の担当者に伝えるなどの業務や、被災地の巡回、様々な情報収集とそれらの関連情報のとりまとめなどの業務を担われました。

震災対応相談センターの業務は、9月末まで受け付けを続けられ、また、これと並行して、協会では、「非被災地での情報発信と情報共有」など、大きな犠牲を今後につなげるための様々な取り組みが進められているとのことでした。

安田さんは現在、震災前の協会職員としての業務と災害関係の対応の両方を並行して行っているとのこと、被災地では、まだまだ地震の爪痕は深く、災害後の対応に追われる毎日が続きそうです。大変な状況は変わらないようですが、協会のスタッフとして、多文化共生マネージャーとして、復興に向けて少しずつ歩き出してくれること、そして時間はかかるかもしれませんが、今回の教訓を今後の地域づくりに活かしていただくとともに、被災地以外にも情報発信していってくれることを心より願っています。

三重県での多文化共生

被災地では、今もなお大変な状況が続いている中ではありますが、研修で発表したプランの実現に向けて着々と進めている三重県の

堀切さんの取り組みについても紹介したいと思います。

堀切さんが、研修の際に発表したプランは、「学習支援のプロジェクト」。三重県内の次世代を担う外国につながりを持つ子どもたちがいきいきと学び、夢に向かって未来（進学、進路）を選択できるための環境づくりを目指す、といったプランでした。

堀切さんが、このプランをどのように進めていこうかと考えを巡らせていたときに、内閣府の「新しい公共支援事業交付金」を活用した三重県事業の募集がありました。その際、鈴鹿市を拠点にして多文化共生に取り組むNPOから「外国籍児童生徒の放課後学習支援事業」を提案したいと相談を受け、堀切さんはタブマネのネットワークを活かし、名古屋市にある学習支援教室を紹介し、先進地調査に同行されたそうです。偶然にもこのNPOの提案は、タブマネ養成研修で発表した堀切さんのプランの考えと非常に近いものがあり、応援のプレゼンを依頼された堀切さんは、プレゼン当日、想いを熱く語ったそうです。そうしたこともあってか、約7倍の狭き門を突破し、このNPOの提案が採択され、平成23年10月から始動しています。現在は、大学教授などの専門家や教育関係者などを巻き込んだ運営委員会に、三重県職員の立場で堀切さんも参加し、実際の学習支援の成果も少しずつ出始めているとのことでした。



運営委員会に出席する堀切さん

多文化共生の取り組みは、タブマネ個人が進めるだけでなく、行政やNPO、企業など地域の様々なステークホルダーを巻き込むことが不可欠であり、研修でも講師からその大切

さを教授されます。

堀切さんは、この事業の推進にあたり、「私の想いを形にしてくれたNPOに感謝したいし、より成果を生み出せる事業となるようタブマネとしてかかわっていききたい」と語ってくれました。

がんばれ！ 多文化共生マネージャー

10日間をJIAMで共に過ごし、全国各地に帰っていった多文化共生マネージャーたち。地域でのフィールドワーク等を行い課題の抽出を行ったうえで、研修の成果としての3か年プランを作成いただいています。そのプラン実行中での、環境の変化等による軌道修正を行いながら、着実に取り組みを進めてほしいと願っています。

また、タブマネ認定後間もない時期の大震災。震災以降約10か月の間、自治体職員として、協会職員として、そして、多文化共生マネージャーとしてそれぞれの地域で、立場で活動していただいたことと思います。また、これからの、連携を取りながら支援活動を続けていっていただくことと確信しています。

震災後には、各地で防災が重要課題となっている中、多文化共生の取り組みにおいても、災害時の対応、特に日ごろからの顔の見える関係というものが、ますます重要となってきました。全国各地で、災害を切り口にしての、多文化講座も増えてきています。地域の事情をよく知る多文化共生マネージャーとして、他地域のタブマネからも情報提供などの協力を得ながら、多文化共生を推進してほしいと思っています。

日々の業務に忙殺されているタブマネのみなさんもいらっしゃると思いますが、地域をより深く知り、地域の「多文化共生」のため、さらには日本人や外国人など関係なくお互いに住みやすいまちにしていくなために、多文化共生マネージャーとして役割を担っていただくことを期待しております。

がんばれ！ 多文化共生マネージャー。